

一九七七年二月一日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社

発行人 滝野 忠

東京都渋谷区本町六丁目一八の二コーポ幢ヶ谷九〇四 電話(03)337714649

FAX(03)329915367

振替 〇〇一〇〇一九一五八四三二 労金 東京労金本店 No.1154163

購読料 月額 600円 6カ月前納制

〈もくじ〉

■巻頭言■

政党支持率と日本政治のゆくえ 2
歴史の発展と人間のいとなみ 3

——階級関係ということ——

内外の「社民党の変質」に学ぶもの 6
企業内複数組合でチエツク、競争を 8

——「労働運動に一言」——

「新社会党」の「初仕事」!! 沖縄闘争 11
——矢田部委員長を先頭に——

キューバは空、海、土地、旗は犯させない 14
——米民間機撃墜事件の真相——

◇投稿◇ 批判の時代から責任の時代へ 15
読者からのおたより..... 16

◇残部僅少 上野建一著 社会通信刊◇
政界再編後を読む——護憲の旗を掲げて
四六判上製、二百頁、千五百円(千三百十円)

旬刊 社会通信

NO. 633

一九九六年四月一日号

一九九六年四月一日発行
(毎月一日・二日・二日三回発行)

■巻頭言■

政党支持率と日本政治のゆくえ

連合の政治意識調査「中間報告」が発表されたのは二月九日であった。世の動向は住専、沖繩、村山辞任から橋本自民党首班内閣へと激動。昨年末の調査は気の抜けたビールのようなもの、と同時に連合の社会的影響力は今では無きに等しい有様で、話題にもならなかった。調査結果の関心は、どれだけ旧自民が支持率を伸ばしているか、社会（今では社民）の支持率は、に限られていたからだ。

予想どおり旧自民が大きく支持率を伸ばし二三・二%（自民七・二、新進一四・八、さきがけ一・二）、旧社会一四・二%。連合の旧意識調査は九三年。この時の政党支持率は自民八・六、民社一・三、日本新党五・八、公明・社民連ともに一・六の二〇・三%。それに比べると、旧自民と併合された新たな自民勢力は二・九%ふえている。他方、旧社会党はマイナス二・八%。労組内で社会党（現社民党）の影響力が急速に落ちていることは、種々の世論調査と同じである。ここでもふえているのは、「支持なし」で前回の四九・八%から五八・六%へと、約一〇%もの増加だ。有権者九千万人強、労働者数は七千万弱。労働者の支持が分散するほど、旧自民勢力の支持が相対的かつ絶対的に有位を占めることを証明したのが、連合の意識調査の特徴点というわけだ。

三月初旬、「朝日」「日経」「共同通信」の世論調査が相次いで発表された。「住専」処理策を問うのがメインだが、「今の政治を信頼するか」に「信頼していない」が朝日七六%。これは、「住専処理は」について「良くない」七一・〇%（日経）、「住専処理策凍結・削除を」七五%にほぼ一致している。これでは目立ちたがりやの「龍さん」の存在感がなくなるのも当然で内閣支持率は「日経」三六・七%（五四・三%）、「朝日」三六%（六一%）、「共同」四三・四%（六三・〇%）と急落（かつこ内は前回調査）。支持しないは、それぞれ四三（二〇）、四〇・二（二一・七）、四五・九（二九・二）。

政党支持率の傾向もほぼ同様で与党三党が支持率を減らしている。朝日では自民二四（三六）、社民六（七）、さきがけ一（二）。共同では自民三〇・八（三四・二）、社民五・〇（一〇・一）、さきがけ三・四（二・八）とある。他方野党の新進は朝日で一四（九）、共同一六・七（一四・二）で微増、共産は朝日四（三）、共同三・八（二・七）でこれまた微増の範囲。かつての社会党のように政権党への批判が野党に集中する傾向はない。

興味をひくのは、新進党への態度を問うた朝日の設問で、「よくなった」九、「悪くなった」二八、「変わらない」五五と答えていることだ。自民も新進も同じ穴のむじな。信用できない」との世論の声は「好きな政党なし」「支持政党なし」に累積しているというわけだ。

「支持なし」は朝日五〇%（四四%）、共同三六・五%（三三・二%）で、どの調査でも増加の一途だ。各社によっては「支持政党ない」人に、「どの政党が好きか、答えて」と無理じいするとところもあるが、今や「支持なし」は五〇%強。まったくの無関心は二〇%として、三〇%が「意識的な支持なし」層に、つまり「投票したい、支持したい政党がない」層に変わった。これからの動向は、これら「意識的支持なし」層が、「支持できる」政党が生まれるかどうかだ。

その意味で興味深いのが、共同の調査で、生まれ落ちて間もない「新社会党」の支持率一・二%との数字だ。支持率に一喜一憂するのは俗物たちにまかせ、新社会党は「真実一路」を貫き、総選挙で勝利することを期待したい。

（滝野 忠）

歴史の発展と人間のいとなみ

— 階級関係ということ —

大バッハ、モーツァルト、ゲーテ

二十数年も前になりますが、学生時代同じ下宿にいたIさんはシャルランのレコードを何枚か持っていて、私がお茶を飲みに行くときよくかけてくれたものでした。彼に言わせると、「シャルランのレコードは音が良い。」とのことでした。その中の一枚に、A面にA・ヴィヴァルディの作品を、B面にはそれらを編曲した大バッハの作品を収録したものがありません。今でもそのジャケットを鮮明に記憶しています。それは、A・ヴィバルディのかの有名な「合奏協奏曲、調和の幻想」作品三十一、四つのヴァイオリンの協奏曲「口短調」と、それを大バッハが編曲した「四つのチェンバロの協奏曲イ短調BWV一〇六五」等を聞きくらべられるように企画されました。四人のチェンバロ奏者の中に、現在では押しも押されぬ大指揮者クラウディオ・アッバドや、室内楽の名手ブルーノ・カニーノの名も記載されていてこのレコードはこうした演奏家達のはつらつとした青春の記録として残るに違いありません。

大バッハの作品の中には、A・ヴィヴァルディやB・マルチェロ、そしてテレマン等の作品を編曲したものが多々あることは、大バッハに魅かれ少しく興味を持っている人ならば、誰でも知っていることでしょう。しかし、大バッハの手にかかるとA・ヴィヴァルディの曲も大バッハの曲になるのです。同じ主題であるのに主題自体が別のもののように、そして、みごとに立体感とおごそかさにも包まれた作品に変わるのです。

天才モーツァルトにも、大バッハの名曲である「平均律クラヴィーア曲集」等から、何曲かを弦楽三重奏や弦楽四重奏の為に編曲した作品があります。どんな天才と言えども、何もないところから突然何かが生み出されることは決してないのです。誰もが先人のまねをし、自分のものとし、そして自分のものを作って行くのでして、どんな天才といえどもまなぶことなどどのような才能も開花しないのです。

「……学問は、人類が遠い昔から経験と思考によつて積み重ねてきた知識を整理し統一したところの体系であつて、偶然の思いつきや不思議な感応によるインスピレーションのようなものではない。もつとも、夜中に目がさめて突然すばらしい考えが浮んだとか、散歩しているときにむつかしい問題が解けたというようなことで学問が進歩したという例はあるかもしれない。しかし、そんな場合でも、それは、その人が平素から蓄積して持っている学問的な素養があるからのことであつて、全然素地がないところに突然飛躍的に学問といえるようなものが出現してくるのではあるまい。ゲーテのような偉才さえ、どんなにえらい天才でも、自分だけの持つ素材の上に立っているならば、偉大な結果を挙げることはできない」というのは立命館大学の総長をされた末川博氏の言葉です。（『生きるということ』雄渾社刊、一四〇―一四二P）

「共産党宣言」

『共産党宣言』の第一章は次のように始まります。

「今日まであらゆる社会の歴史は、階級闘争の歴史である。」

自由民と奴隷、都市貴族と平民、領主と農奴、ギルドの親方と職人、要するに圧制者と被圧制者はつねにたがいに対立して、ときには暗々のうちに、ときには公然と、不断の闘争をおこなってきた。この闘争はいつも、全社会の革命的改造をもって終るか、そうでないときには相闘う階級の共倒れをもって終った。

歴史の早い諸時期には、われわれは、ほとんどどこでも社会が種々の身分に、社会的地位のさまざまな段階に、完全にわかれているのを見出す。古ローマにおいては、都市貴族、騎兵、平民、奴隷に、中世においては、封建君主、家臣、ギルド組合員、職人、農奴にわかれていた。なおそのうえ、これらの階級の一つ一つのなかで、たいていまた別々の階層にわかれていた。封建社会の没落から生れた近代ブルジョア社会は、階級対立を廃止しなかった。この社会はただ、あたらしい階級を、圧制のあたらしい条件を、闘争のあたらしい形態を、古いものとおきかえたにすぎない。

しかし、われわれの時代、すなわちブルジョア階級の時代は、階級対立を単純にしたという特徴をもっている。全社会は、敵対する二大陣営、たがいに直接に対立する二大階級——ブルジョア階級とプロレタリア階級に、だんだんわかれていく。〔『岩波文庫版』三八P～四〇P〕と。エンゲルスは一八八八年英語版で次のように註を付けています。

「ブルジョア階級とは、近代的資本家階級を意味する。すなわち、社会的生産手段の所有者にして賃金労働者の雇用者である階級である。プロレタリア階級とは、自分自身の生産手段をもたないので、生きるためには自分の労働力を売らなければならない近代賃金労働者の階級を意味する。」と。又、冒頭の「今日まであらゆる社会の歴史は」に対して、「すなわち、あらゆる書かれた歴史である。」と註を付けています。

人類の歴史、そして富

中学生の頃に、人類の歴史は五十～六十万年もあると教わりました。大学生の頃には、二百万年程の歴史があるということでした。今から三年前、松本市は「松本城四百年祭り」と「信州博」でおおわらわでした。「信州博」会場に設置されたパビリオン「くじら館」では地球と人類の歴史をテーマに、展示、解説がされていました。当時の研究成果として人類の歴史は四百万年ということでした。二年前の秋には新聞各紙は、人類の歴史は四百万年前に遡ることができると報じていました。昨年、NHK・TVを見ましたところ、その番組によりまずと、五百万年の歴史があるとのことでした。

かつて、労働運動に関心を持ち出した頃、松下幸之助（松下電器）や上原正吉（大正製薬）の年収と、自分の年収と比較して少しく驚いたものですが、人類の歴史の長さを考えると、一人の人間の一生などは比較しようと思う方がバカ気ている程に短い訳です。人生の短さを嘆いてもいたしかたないことですが、仮に百歳まで病み上手に生きることができるとしても、現在読みたい本、聞きたい音楽だけでもとても接し切れず、私の想いは遂げられないというところでしょう。

人類はどうも五百万年もの歴史を持つていようなのですが、この人類の歴史に対するマルクスやエンゲルスの歴史観の土台にあるものは、次のような考え方です。

「われわれはあらゆる人間の存在の、したがってまたあらゆる歴史の第一の前提を確認することからはじめなければならぬ。すなわち人間は、『歴史をつくり』うるためには、生きてゆくことができなければならぬという前提である。ところで生きるのに必要なのはなによりもまず食うことと飲むこと、住むこと、着ること、そのほかなおいくつかのこと

である。したがって、第一の歴史的行為はこれらの欲望をみたすための手段の産出、すなわち物質的生活そのものの生産である。しかもこれは、ただ人間の生命をつなぐためにも、今日なお数千年まえとおなじく日々刻々やりとげられねばならない歴史的行為であり、あらゆる歴史の根本条件なのである。したがってあらゆる歴史的理解にさいしての第一歩は、この根本事実をその全意義とその全範囲にとわたって観察し、それに当然の地位をみとめることである。——第二の点は、満足された最初の欲望そのもの、満足させる行動、および満足のためのすでに手にいれた道具があたらしい欲望へみちびくということであり——そしてあたらしい欲望のこの産出こそ第一の歴史的行為なのである。第三の関係は、自身自身の生活を日々あらたにつくる人間が他の人間をつくりはじめること、すなわち繁殖しはじめることであり——夫と妻との、親と子の関係、すなわち家族である。」(『ドイツ・イデオロギー』岩波文庫版三四P～三六P)

この事をエンゲルスは晩年、『家族・私有財産・国家の起源』のなかでは、「唯物論の見解によれば、歴史における窮極の規定要因は、直接的な生命の生産と再生産である。しかし、これ自体はまた二種類のものからなる。一方では、生活手段すなわち衣食住の対象の生産と、それに必要な道具の生産であり、他方では、人間自身の生産すなわち種の繁殖である。特定の歴史時代の特定の国の人間がそのもとで生活する社会的諸制度は、二種類の生産によって、すなわち、一方では労働の、他方では家族の発展段階によって制約される。」(『岩波文庫版九P～一〇P』)と、要領よくまとめています。

人間労働

人類に歴史が存在するのは絶え間なく人間労働が存続して来たからです。労働するには生産手段と労働力が結合されなくてはなりません。そして、階級区分の基準は、生産手段の所有・非所有にあるわけです。我々の生活する「資本制社会」(資本主義社会)は、一方に社会の主要な生産手段を私的に所有する資本家階級が、もう一方に生産手段の非所有者にして自らの労働力商品を売る以外に生活してゆけぬ労働者階級が、労働力商品の売買を通じ、搾取・非搾取の関係で結びついているのです。この事実を否定することを、誰ができるのでしょうか。

私達はまぎれもなく階級社会に生活しているのです。あらゆる社会現象に階級対立が反映していることを、労働者・勤労国民の前に明らかにすることが、心ある歴史科学の徒の任務でしよう。

抽象そして法則

サンテグジュペリは『星の王子さま』の中でキツネをして、王子さまに次のようにしゃべりかけます。「さっきの秘密をいおうかね。なに、なんでもないことだよ。心で見なくちゃ、ものごとは見えないってことさ。かんじんなことは、目に見えないんだよ」(岩波書店九九P)。もし、階級関係が我々の目で見え、耳で聞くことができ、手で触れて感じ取れるのなら、学問は、科学は、必要ないでしょう。階級関係はまさに生産関係であり、経済関係です。「経済的諸形態の分析では、顕微鏡も化学的試薬も用いるわけにいかぬ。抽象力なるものがこの両者に代わらなければならぬ。」(『資本論』岩波文庫第一分冊一二P)わけです。私達が「かんじんなこと」を「心で見」るとは「抽象力」をして階級関係を観ることに違いありません。

(中澤秀行)

内外の「社民党の変質」に学ぶもの

党の変質をもたらしたもの

われわれが社民党を連立政府のなかで第三保守党に変質したという場合、単なる批難のためにいうわけではなく、理論的に分析した結果としてのことである。したがってどのような場合でも保守党との連立政府に参加してはならないといっているわけでもなく、保守党と連立したから変質したといっているのでもない。連立政府は資本主義社会のワクのかなかで実現の可能な政策を実行するわけで、まさに改良の積み重ねを行うことである。当然その政策の重点は、勤労国民大衆の生活と権利をよりよくすることのために緊急性の強いものに集中されなければならない。連立政府に参加してただけの「改良の政策」を実行できるかは、そのときの政治、経済情勢と政府・国会内における他の政党と自党との力関係によって決まるわけである。もちろん、政府でどのポストをとり、その大臣がどれだけの能力と指導性を発揮できるかも力関係に含まれている。それに加えて連立内閣・政府の存続期間がどれだけかによっても左右されることはいうまでもあるまい。

旧社会党（現社民党）がまず細川連立内閣で失敗したのは、革新政党として踏み外してならない原則を踏まなかったからである。永年にわたる自民一党支配の政権を倒して、保守の一部と手を組んだとはいえ、諸悪の根源である政・財・官の癒着に政治改革のメスを入れることができれば（たとえ小改革であっても）、連立内閣として意義あることであった。したがって細川連立内閣を支持し成立させることは当然のことであった。ただ問題は、連立を組む条件に、当時の保守側の代表者の小沢一郎（現新進党首）、武村正義（現新党さきがけ代表）の各氏等が、連立の政策協定（連立合意）として持ち込んだのが「小選挙区制」であった。政治改革ではなくて選挙制度改革であり、当時の社会党の承認できるものではなかった。「小選挙区制」は永久政権をねらい、憲法の改悪をめざす保守勢力の「特効薬」であり、革新勢力にとつては解党を招く「毒薬」であった。そのことは、いかに無能な執行部であっても理解できたはずであった（当時の執行部は山花・赤松ライン）。にもかかわらず社会党はその毒薬を飲んで細川内閣に入閣したのである。

山花執行部が細川連立内閣に加わることによってそれ以後の社会党は、坂を転げるように革新政党・護憲の党としての基本を捨てて自滅への道を歩むことになったのである。山花執行部が自滅への道を選んだ背景には、「新宣言」以来の右傾化があり、ことに「江・田・金・山」といわれた自民党の金丸信副総裁、社会党の田辺誠副委員長、山岸章連合会長等によって、第二保守党づくりが画策されていた。保守二大政党へのいわゆる政界再編は、かねてから小選挙区制とのセットで日本の支配階級の「戦略」だったのである。

当時の社会党にとつて、永く腐敗した自民党政権を倒すという大義名分による細川内閣への入閣しか選択の道はなかったわけではない。党内の会議でも各地の県本部段階から「閣外協力」の提起がなされていたのである。「閣外協力」の方針をとれば、小選挙区制などの「党是」ともいうべき問題で妥協する必要もなく、内閣の提出する諸法案に注文をつけることができただけである。しかし入閣大臣病にとりつかれた山花氏等の幹部は一顧だにしなかった。その後の村山内閣も含めて、新党ブーム・政界の再編劇の「熱病」に巻き込まれた旧社会党の悲劇としかいいようのない状態であった。

村山連立内閣は、周知のごとく勤労大衆の生活と権利を後退させる沖繩問題、消費税、

住専と次々と自民党さえやりえなかつた課題を「連立内閣の維持」を名分に次々と打ち出してきている。その結果は、自民党や新進党などの保守党と本質的に異なるところのない政党に変質して、今日の社民党が存在するわけである。

何によって変質するのか

すでに述べたように、社民党の変質は一朝にして（入閣だけで）できたわけではないことは改めていうまでもない。政党としての理念、政策、運動、組織、財政、機関紙など全般的に十数年来後退を続けてきている。ことに社会党は労働組合の機関依存を続けてきた結果として、総評から連合への労働組合幹部の変質、国鉄の分割民営化、さらに人べらし合理化の全国的展開など資本の側からの攻撃・圧迫によって大衆闘争は大きく後退し、運動が右傾化を強めて行ったのである。

それでは、第三保守党への転落はどのようにして行なわれるのか。新社会党は発足の当初から、かつての民社党や現在の社民党について反面教師として学ぶ必要がある。

その第一は、議会主義政党になること。議会制民主主義の立場をとる党として議会活動を重視することは当然であるが、政権党との駆け引き、妥協などが多くなってゆく。そして連立内閣への入閣の機会も度々あることによって身も心も国会内の政治に重点がかかり、支持基盤である勤労大衆の党でなくなり、保守と同じ党運営となる。当然のこととして選挙戦における得票と議席数だけに関心をもつ選挙第一主義の党になってしまうのである。社民党の今日の姿は右に述べた通りであるといえよう。

第二には、選挙党、議会主義政党にとっては大衆運動と共にたたかつたり、大衆に根を張った組織には成りえない。したがってマス・コミなどに追従する政党となる。新聞などの世論調査に一喜一憂することにもなる。

マスコミや流動票やいわゆる無党派層の人氣に迎合することになるため、党の綱領、基本政策などの改悪が行なわれ、支配者である財界・保守勢力と対決意図のないことを明確にするようになる。そして連立内閣の一員となったことによって、逆に財界・大資本の擁護政策を実行するになる。村山内閣の自衛隊合憲、安保条約堅持、そして現在は「住専」の処理による金融資本を守る立場になっている。

このようにして変質した社民党は、それならヨーロッパの社民党のように第三の進歩的保守党として生き残り、政権もとれるようになる展望でも生れるのかといえ、日本の場合は益々ダメになっているのである。最近のマスコミの世論調査では、六%か五%の支持率となつてしまい、共産党の支持率が上つているのでだんだん近づいているのである。この程度の支持率で、小選挙区制のもとで次の総選挙をたたかうとすれば、ひとけたの議員数になってしまう。日本の社民党は、連立政権への対応を誤つたために決定的な自滅の道を突き進むことになっている。

新社会党は、内外の社民党の実績と誤りを十二分に総括するなかから日本の改革をはかるうとして（具体的な内容は、週刊「新社会」の三月十二日号を参照していただきたい）。今日の社会はこの長期的不況のなかで大失業時代を迎えている。政・財・官の癒着による資本主義体制の悪業は勤労大衆へのシワ寄せとなって表面化している。これに対する政治・経済・社会全般にわたる改革は緊急の政治的課題である。新社会党は大衆運動と一体になって、勤労者のあらゆるたたかいと党の方針・政策を一体のものとして推進しなければならぬ。新社会党の基本的政治姿勢はまさにこの大衆運動と一体の政治闘争の推進にある。党の組織的建設もこのなかで展開される。

（上野建二）

企業内複数組合でチエツク、競合を

——「労働運動に一言」——

はじめに

わたくしが長い間所属していた分裂組合である電産労組が、その方針を変えようとしている。一貫して合理化、反原発、反戦のスローガンを掲げ闘ってきた。昨年まで春闘、秋闘時には社屋にステッカーを貼り、腕章着用、会議拒否等を実施し、毎年十月二十六日反原発デーには社屋前に地域の人たちと共に座り込みを行ってきた。連合下では孤立した闘いであったかもしれない。全九電、全北電などと共に全電力に結集し総評加盟していた。その全電力が連合結成後五年にして労資一体化路線、原発推進の旗振り役を任じている。電力総連との産別統一をする方針が確認されたのである。実現は今秋の予定である。まさしく、水と油が一つになろうとしているのである。エネルギー政策に関する双方の論議の経過は次のように記されている。

(1) 両産別は、連合の資源、エネルギー政策を基本にして、①環境と経済性を重視したエネルギーの安定的確保、供給 ②省エネルギーの推進 ③新エネルギーの研究、開発促進、などを柱とした「総合エネルギー政策」の確立、実践に取り組んでいくことで合意した。

(2) 原子力発電については「未来にわたる電源ではない」との認識で一致をし、省エネルギーの国民的な理解活動などの展開や新エネルギーの研究、開発を促進する運動に積極的に取り組んでいくことで合意した。

また、「代替エネルギー源の実態」や「今日段階における電源構成の中で約三割を占める現状」などから、原子力発電を除いた電源構成は、社会的に困難な現状も認識し合った。(3) しかし、両産別、各単組の今日までの運動の経過などから、現時点では原子力発電全般についての一致はみていないが、現状と将来的な原子力発電の位置付けについての認識は一致できていることから、統一実現までに引続き論議を深め、一定の合意形成が図られるよう努力していく。

総評の解体、社会党の変質、闘う組合の横の連けいなくなってしまう情勢下の選択であろうが、私の中ではさまざまな思いが吹き立ってくる。

さて、時期的には、いろいろな組織、団体において総評、社会党の解体に至る戦後五〇年の労働運動、革新政党の活動等の総括運動が行われることと思うが、わたくしなりに考えを述べてみたい。

克服すべき課題については、すでに学習の重要性、組織の民主化、下からの運動づくり、職場闘争、反合闘争の強化、オルグ、教宣活動の重要性、企業内の弱点の克服、戦闘性、横の連けい強化等々提起されているが、少し視点を変えて提起し議論を吹掛けてみたい。

連合路線は資本の政策である

長い間分裂組合の中になると、労働組合の労資協調、「合理化」協力路線が、実は全く資本の労務政策であり、労働者支配そのものの具体化されたものであることを実感する。

連合路線と言われている、その中味は、旧同盟路線の延長線上にあることは疑問のないところであろう。その同盟路線を形づくっていった労働組合の結成時の史実を報告すれば理解できると思う。

一九八三年十月二〇日の朝日新聞の記事である。「ひとくち多か」欄に瓦林潔氏（後の九州電力社長）は語る——「第二組合」「結成時に三〇〇万円保証」「土壇場で、証拠隠滅も」——のタイトル。

『いまの九電労（九州電力労働組合）同盟系』は、昭和二七年の暮れに産声をあげたが、これには、総務部長だった私も裏で一役買ったんじや。当時の電気事業の労組は、鬼の電産（日本電気産業労働組合）といって、炭労（日本炭鉱労働組合）と並んで総評の最強部隊でねえ。まあ国労、動労みたいなもんよ。……新組合結成の届け出をするにしても、ピラをつくるにしても金がかかるのに、ろくに持っていない。そこで川端（福岡市）のホテルに、戸畑とか本社の有志を十人余り集めて「私も応援するから、健全な組合づくりには、がんばって欲しい」と激励してねえ。私が保証人になって、当時の金で三〇〇万円を福岡（福岡銀行）から出してもらったんだ。……この年の五月、電産が、私を不当労働行為で、地労委（福岡県地方労働委員会）に提訴したんだ。当時、福銀の組合は左もいとこで、例の三百万円のりん議書をみた組合員が、電産に通報したらしいんじや。それで「第二組合の結成に手を貸した」といきり立ったわけよ。

一瞬、びつくりしたけど、私は「新組合の結成は、社員の自然的な行動。何かの間違いじゃろう。」と突っぱねたんだ。実をいうと、提訴の知らせと同時に福銀に行つて、親しい常務に頼んで、りん議書を別物に差し替えてもらったんじや。それで、決定的な証拠がなくなつたからねえ。中労委まで行ったが、結局、おとがめなしよ。助かったなあ。（当時の三〇〇万円は現在に換算すれば、〇億円に相当するのだろうか）

同じように、わたくしが所属していた中国電力の社長、会長を務め、現在の中国経済連合会会長も、中国電労結成時の発起人の一人である。そして、これ等組合の方針に抵抗し反対する者に対しては、厳しい弾圧、不当労働行為が繰り返された。

総評系の電産中国の組合員に対してはもとより、各電力職場で活動する共産党系、社会党系組合員に対しても例外ではなかった。大金を使つても、その時々鬼をつぶし弱めることが資本にとつての至上命令である。

東京電力の共産党系の組合員一六五名が「思想、信条を理由に賃金、昇進で差別を受けた」として差別された賃金、慰謝料などの損害賠償と謝罪文を求めていた裁判闘争も一九年ぶりに東京高裁での和解が成立した。

東京電力が二〇数億円（平均すれば一人当たり約千二百万円）支払い、昇進の是正、今後の公正な取扱いすることなどが内容である。

このように抵抗する要素は徹底的につぶそうとするのは資本の本性である。階級の本質である。

連合発足以来五年経過したが、今日のように社会の矛盾が表面化する中でも弾圧や不当労働行為が表面化しないのは職場闘争、反合理化闘争など抵抗闘争がなくなっているからである。

かつてのように資本の側の組織が前面に出て、連合指導部が提起しているような方針や政策を提起すれば事情は違っていたであろう。資本の覆面軍団（連合指導部）に労働者の

敵対心が抑制されているのではないか。そこに労働貴族を生んだ資本の巧妙な攻勢がある。電産中国は第二組合指導部と一般の組合員を明確に区分してきた。指導部は会社の労務部の一翼であり、対決すべきグループと見て批判し職場の組合員は共闘すべき仲間としてとらえてきた。

労働組合という看板を背にしての資本の代弁者としての連合指導部の言動に翻弄されてはならない。徹底した批判と対決の姿勢が必要ではなからうか。その延長線上には必然的に資本の本性剥き出しの刃が襲いかかってくるであろうから。その衝突の中から階級的自覚が高まった労働運動へ発展していく芽が再生されていくのだと思う。

戦後の労働運動、政治活動の中で、そうした闘い発展への核は形づくられてきていると確信している。

労農派、講座派の連けい追求を

わたくしたちは、いろいろな文献で労農派と講座派の歴史やその基本的な相違点などについて学んできた。共産党指導の労働運動の誤りについても体験してきた。批判すべき点も多い。にもかかわらず今日の階級情勢を思うと双方がもつともっと歩み寄り連けいすることを追求すべきだとの思いが強い。資本の施策を具体化する連合指導部の方針に対しても講座派系列の諸資料によって労働者の自覚を呼びおこすことも多々ある。にもかかわらず、連合発足時の双方の話し合いは充分なされなかつたように感じている。これでは日本の労働者階級の前途は拓けないのではないかと危惧する。

長い間、わたくしの労働運動の拠点であつた電産島根支部には数人の共産党系の組合員がいた。いろいろ対立があり、議論もしたし、追及もされたが、切磋琢磨し合つて闘いをつくつてきた。随分協力もしてもらつた。意見の一致することも多かつた。だから、労働者教育協会編の「春闘学習、教宣資料集」「賃金白書」なども、労大の春闘ハンドブックと合わせ大いに活用してきた。

今でも学習協の人たちとは話すことがある。彼らの学習会、講演会にも参加してみることもある。とにかく議論しながらも一緒に闘つてきた。そんなに大きな違和感がなかつたのは、お互いに厳しい資本攻勢にさらされてきた資本に対する認識が、あまりにもはつきりとしていたからではなからうか。

戦後の一時期ではあつたにせよ、東京、大阪、京都、福岡など主要都市で革新首長誕生の背景には社共共闘の貴重な体験がある。

労農派、講座派連けい強化の視点が、これからの階級的運動の展望を拓く鍵であると思う。是非、議論を拵けてもらいたいものである。

もう一つ「企業内複数組合でチェック、競合を」の主張である。労働者が一つの組織に結集して団結力を発揮することが理想である。しかし、日本のように民主主義の定着度合いが低く、今日的な労資の力関係の中では別組織によるチェックと問題提起機能を発揮できる勢力が必要である。民主主義が未成熟な過渡期には、思い切つて企業内複数組合の存在を積極的につくりだす視点も論議に価することだと考えている。

(濱崎 忠晃)

「新社会党」の“初仕事”!! 沖縄闘争

— 矢田部委員長先頭に —

少女暴行事件（九五年九月四日）らしい、米軍基地縮小↓撤去問題から、さらに安保条約をゆさぶっている。

沖縄闘争は、日米両首脳的主要課題にまでなってきた。この時、一月一日結成したばかりの「新社会党」（矢田部理氏を団長に二八名）は、旧社会党が殆んど放棄していた平和運動を「まずこの沖縄闘争を闘う」（調査団の合言葉）ために、さる二月三日から三日間、闘いの火が燃え続けている沖縄へ渡った。

〈矢田部団長挨拶〉　ここ何年か、日本社会党は、平和運動、その中でもとくに「基地反対」の運動を放棄してきた。さらに独占の党自民と政府につくや、自衛隊・安保・消費税・君が代・日の丸・原発・年金など節操を売り続け、国民の信頼を急速に失い、今日、社会党はついに社民党へと変質してしまった。

われわれ「新社会党」は、この点も総括し、党の初仕事として、今回の沖縄共闘を計画し、実践し、党発展に邁進したい。

そして、現地到着後まず軍事評論家藤井治夫氏と中大伊藤成彦教授のレクチャーとつぎのような現地諸団体との交流、そして基地視察の中から、沖縄の基地の実態をつぎのように把握し、今後の闘いに生かすこととした。

〈諸団体との交流〉　沖縄社民党では、沖縄社会党でゆくか等の意見も強かったが、中執は上原（康）議員の横車もあり、「嘉手納町役場の課長が声ひそめ」「上原康助よろしく頼む」と（龍）「ようやく社民党に改名（中執で改名は問題があり正式には三月末の党大会で決定）、しかし今回の調査には同志的に交流した。新垣委員長と仲宗根書記長と照屋参議院議員（推せん）が出席。

さらに、基地の地主関係（全体の議長）の有銘氏「軍用地違憲訴訟の有銘氏はサイパン生れと幼時を語る（龍）私はハワイ植民生れ、本質は「棄民」政策の犠牲（佐）」、反戦地主の池原安里氏、社会大衆党の鳥袋委員長、仲本衆院候補、さらに高教組等との交流、また左記基地関係の市長等が積極的に調査に協力し、共闘をちかい合った。付記、各団体とも社会↓社民の変節を慨嘆された「沖縄も「社民」と改め苦渋せる旧社会党の面々と会ふ（竜）」。

〈基地実態の概要〉　▽基地面積は在日米軍の七五・一％（密度本土の三五倍）、二三七・三九一平方km、四五カ所（本土は九五カ所、広さは青森・神奈川と続く）。県内面積比十・五％（本土内比〇・六％）、本島内比十九・九％。演習海域三一カ所、同空域一五カ所、二二三万三六〇平方km（このためにJALなどは高度三〇〇mでナハ空港進入。危険）。基地返還は復帰後たったの一五％、本土は五％。

▽本土基地は自衛隊と兼用で米軍専用は一一・一％に比し、沖縄では九六・八％。

▽基地経費（米軍自払⇨日米地位協定二四⇨とあるのに）六二八七億の七五％は日本負担、この内「思いやり」予算（条約にない）は七八年の六二億から四四億の二七一四億円（沖縄には四分の一の六一七億円）、在日米兵一人に一三三〇万円かかる（国民一人五千円負担）

▽固定資産税はゼロ。カー税後記。

▽基地内人口⇨米軍一七、七〇〇人（全国では五二、六〇〇人）日本人労働者七九二八人（昔二七、〇〇〇人いた）。

▽米軍犯罪（基地害）⇨今回の少女暴行事件も入れて、七三年復帰後四、七一八件、内

凶悪犯五一〇件、この中での悲惨な五〇年の六歳の恵美子ちゃん事件(米兵の強姦→殺害)も忘れられない。全体比、復帰後二四年間に窃盗四二・一％(一、九二一件)、粗暴犯二四・一％(二、〇九六件)、凶悪犯一四・一％(六五二件)など、検挙(率悪い)数四、五〇〇人、年平均一〇〇件。

▽CAR税Ⅱ県民は約一百万円、米軍(二七、〇〇〇台・Yナンバー)は一九、〇〇〇円で県民の六分の一、高速料金タダ(年二億円・住専同様税金払い)。人身関係保険率はたったの一〇％で損賠等も低く、事故後は基地内へ逃げ込み、検挙率も低い。

△処理怠慢Ⅱ例えばナハ軍港等、二〇年前に返還合意したのに処理されていない。元の土地にして返せ!

〈経済〉 昨年、十ホテルで経常利益をあげたのは二軒だけ。失業率は五％で本土の倍近いが、世論の方向は基地撤去による貿易・観光・文化立案でいけると一致している。米軍不払の土地税も収入源。沖縄にコンパスを当て、北京等を含む「東アジア交易圏」構想。「貧しくも基地害や戦禍よりはいい」というのが、県民の本音。

〈八万五千人決起〉 「十・二二」一八団体が呼びかけ人となり、一五〇組織が賛同、当初三二五万結集で準備したが、会場までの足代を無料にすることに赤字のバスの労資が賛成、運輸省関係も口説いて実現、また集会後はゴミ一つ残さないなどのようなエピソードが一杯ある中で、ついに八万五千人(本土から千人)の大結集に成功。米英等のマスコミも大きく取り上げた。復帰闘争ぐらいに盛り上げつつある。本土はこの統一戦線作風を深く学ばなければならぬ。(以下は、基地点検の実態)

〈普天間飛行場〉 宜野湾市(本島の南五分の一に位置・桃原市長が応接、「有事」説くペリー長官を「そらごと」と宜野湾市長の桃原氏はいふ(龍))のご真中にばん居し、市の三三・二％Ⅱ四・八一平方Kを占領し、経済社会政策を強く妨害し、騒音(地下鉄ナミ)・墜落(過去五七件死者八四人)事故は絶えず、この飛行場の廃止問題は日米首脳の議題にも上っている。あの八万五千結集で普天間高三の仲村清子さんは、「女に犠牲はもう止めて下さい」と世界に訴えた。

〈嘉手納飛行場〉 嘉手納町(宜野湾の北)の八三％、一、九九八平方キロ、滑走路三、六五〇m幅九〇m、六〇mの二本、羽田の二倍を占めて、極東最大Ⅱ関係地主六、三一〇人。フィリピンから追われたF15戦闘機など特殊作戦隊が常駐、騒音は地下鉄ナミの八〇Ⅱ一〇デシベル。血圧や消化器等生命に影響。米兵一〇、二〇〇人家族一万、労働者二、四五〇人、中に弾薬庫・学校・劇場・銀行・教会等あり基地都市の態。ここからペトナム、湾岸等へ世界の憲兵として出撃。もう加害者はイヤ!「名も知らぬ可憐な花の咲きてをり嘉手納の墓の外柵近くに(龍)」

〈金武のキャンプ・ハンセン〉 キン町(東島北五分の一に位置し)の六〇％、五、一四四・二平方m、米兵五千が占拠し、大射撃場(四二カ所)が主で四市町にまたがる。トーチカも九千人収容の兵舎もある。

少女暴行事件を起した海兵隊も駐留。演習は一五五ミリ砲が県道(一〇四号)も越えるので、その間交通遮断や、事故もすでに一八六件、山火事七〇件(七三年来)で生活に影響。すでに一六四回・三九、四八五発(沖縄戦上回る)が飛ばされ、ブート岳焼失地域は大きにわたり、山は保水力も失い赤土が海岸へ流出し、漁業やサンゴに影響。「米軍の砲弾に山肌赤茶化して嘆ける少女は「血が流るる」といふ(龍)」。砲撃の度に遠い那覇等からの抗議行動は、復帰後二三年間、月一〜三回、伝統的に続けられ、今日の礎となっている(町役場で田いもの甘煮「田イム」の接待。多謝)。

〈象のオリ等〉 象のオリ、といわれている(楚辺通信施設)(カテナの北、読谷村内)の中に、日の丸焼却で対抗した知花昌一氏(スーパー経営・反戦地主)の契約が三月三一

日に切れる、二、三六平方mの土地があり、トゲのように刺され(村山が知事を訴えた判決も間に合わず)極めて注目されている。なお氏を迎えての新宿集会(九五・一一・一七、市民運動主催)は一、五〇〇人(五〇〇人予定)も参集し注目された。

この基地の手前にヘトリイ(鳥居が門がまえ)通信施設一九七・九平方mがあり、そのゲイト近くに「神は愛なり」(聖書)の立看が目立つ。少女を犯した三人もキリスト教徒である。帝国主義のイチジクの葉宗教奴!

△エンペラーズ・メッセージ(伊藤教授レク) △ニライ・カナイ 私は文学関係で何度か来沖しているが、沖繩では海辺から「南」に「ニライ・カナイ」という宗教理想境があるとして拜まれてきた。「北」は拝まない。「北」には「ヤマトウ」がある。「マグニの丘」から「ヤマトウ」がみえる。あの丘にある各県の慰霊碑には、平和に背く碑文が多く、読むに耐えない。「日本帝(軍) 国主義」を糾弾しているのは、韓国だけだった。沖繩とアイヌの南北の碑もよかった。(ちなみに昨年建立の「平和の礎(イシジ)」には、朝鮮・台湾米兵も含め二三四、一八三人祀る)。

▽免罪への御札 天皇の戦犯追及は、ニュージーランド等が主張した。しかし米国は反ソ戦略や朝鮮戦争推進や七三二部隊等関東軍の活用、さらに内乱説もあり、天皇を免罪する。この免罪のお札に、天皇は、沖繩の基地化の「エンペラー・メッセージ」を秘密裡に出し、かくして今日の沖繩の惨状をもたらした。天皇は、近衛兵に代って今度は米兵に守られたのだ。やはり、安保は見直されなければならない。

質疑に入って私は、沖繩で八万五千人も結集できたのは、沖繩の文化運動(上部機構)が盛んなことが影響してないかと聞いたら、伊藤氏は「沖繩の非武装も、運動のより上りも、文化と哲学の豊かさからきている」と吐露された。

△礎「イシジ」に佇み わが同窓「鉄血勤皇隊」(沖繩一中)も散りし摩文仁の丘に日米兵、朝鮮(二三人)、台湾(二八人)等に出身被爆者を含め犠牲者三三四、一八三人が、「平和の礎(イシジ)」として刻まる。拡げる「平和の波」を想い、波型:。わがイトコ守政や、共に中学へ上った成吉君らの刻名を撫し戦争を憎み反独占を誓う。

「ヒロシマのわが隣人と同姓が摩文仁の「いしじ」に刻まるるを見る(龍)」
「探して大城ヨシの名刻まるる「いしじ」の前に涙して佇つ(龍)」

△最後に大田知事会見 基地点検の後、さいごに、離沖三時間前、知事会見。冒頭に矢田部党代表から「党の初仕事で来沖、沖繩の意を体し聞きたい」、小森党副代表からは「ヒロシマの心と沖繩の心を結びつきたい」と挨拶、知事からは「沖繩問題は、日本主権の一部と強く認識し合いたい。沖繩問題は日本問題。▽四万通余の国民からの激文や小切手等で決意を新たにしている▽中には真珠湾を忘れるな、もあるが、圧倒的に遺族や国民の怒りが多いことを語られ、調査団への協力を求められた。この後、県スタッフから来年の沖繩プロジェクトのレクをうけた。(私事にわたるが、知事はワセタでの同窓(後輩)で「その節は御指導を賜わり…」と感謝とされた。

私の在社系の学生運動でオルグられたことを思い出されたい。四七年目の邂逅。五〇周年写真集を贈らる)

△結語 県民は、県具体案として▽騒音、環境等への国内法適用▽事件(故)にはペナルティ▽行軍やめる▽ナハ空港解放▽検疫本土並▽CARR税、ナンバーの本土並▽被疑者の捜査↓裁判権獲得▽基地運用は自治体の同意などの要求をつきつけている(九五・一・一・四)。新社会党は、右調査の成果と、この具体的要求を実現するよう全国で闘おう。そのため松原・佐藤(有)作成のVTRを党勢拡大に大いに活用しよう。

(文責・佐々木守雄)

キューバは空、海、土地、旗は犯させない

——米民間機撃墜事件の真相——

一九九六年二月二四日、アメリカ領土から飛来したセスナ機二機がキューバの主権と領土保全の侵害を引き起こし、撃墜された。このセスナ機は尾翼が二枚の軍事探索、戦闘行動用仕様の機種でベトナム戦争で使用された型である。操縦パイロットは在マイアミの反カストロ組織、「救出に向かう兄弟たち」に属する亡命キューバ人であった。このグループは「政治的利害をもたない非営利組織」として一九九一年に設立され、米国内で正式に登録している。彼らのセスナ機は下院議員イレアナ・ロスレティネンがアメリカ国防省と交渉を行い、寄付、もしくは非常に低価格で三機を手配したものであった。「救出に向かう兄弟たち」の指導者はホセ・バスルト、CIAに雇われ、パナマで訓練を受け、一九六一年四月の「ビッグズ湾侵攻」に参加した、キューバ国内では名の知れた亡命キューバ人である。

この組織は過去二〇カ月の間に二五回、米国領土内からキューバ領空を侵犯し、一九九四年十一月十日には、空中からピラをまき、翌年一九九五年四月四日にはセスナ三三七型機が首都ハバナ北方五〜十海里を海岸線に沿って四〇キロ飛行、七月一三日には首都上空、航空機進入禁止区域を低空飛行、また九月四日の土曜日には、リゾート地バラデロ海岸沿岸でセスナ機五機、ヘリコプター五機が海上の船団に支援され、作戦を実行し死者を出した。また、一九九六年一月九日、一三日にはフロリダのオパ・ロッカ基地から飛来した航空機がハバナ上空を飛び、憲法に違反する行動を市民に呼びかける宣伝ピラをまいた。通常、毎日約四〇〇便の定期便の乗客、何千人という米国人、外国人がキューバ上空の国際航路を通過し、キューバ航空当局はこれを支援し、サービスを提供しているが、このときは一時的に閉鎖、規制を行った。バラデロ国際空港も入国と出国を規制した。

こうした動きの中で、米国とキューバは民間航空協定を締結し、外交努力を続けて来た。一九九五年八月二八日づけで国務省文書が出され、ハバナの米国利益代表部は十月五日づけで文書五五三、十月一八日づけで文書五七七によって、米連邦航空局がこの組織「救出に向かう兄弟たち」が米国内放送法により禁止されている放送行為を行ったこと、米国防空規制に違反(FAR 91.703)していることを指摘し、また国務省はこの事件の約一週間前一九九六年二月一六日、文書によって違反調査継続をキューバ当局に連絡したところであった。

そしてこの二月二四日、土曜日朝、離陸および飛行ルート¹⁾の報告のない三機が首都ハバナ北方に飛来、午前十時四〇分、キューバ航空当局はマイアミ航空官制センターに問い合わせを行った。しかし、センターは「情報はない。」と応えた。

同日午後、再び三機が領空侵犯、ハバナ航空官制センターが警告、これに対し、一機は「禁止空域を飛行中なのは知っている」と応答し、もう一機は「ハバナに向かつて飛行する」と答えた。この状況下で空軍迎撃機が離陸、海岸線から五マイルと八マイルの位置で二機を撃墜した。第三機は領空を出たため、追撃されなかった。同日、キューバ外務省は正式な文書により、米国防空警備隊が領海内に入り共同で生存者の捜索するという米国防

府の要請を許可した。翌日二月二十五日午前十時には、ハバナ海岸線から九・三マイルの位置で空図、旅行用バッグ、携帯用バッテリーチャージャーが回収された。キューバ政府は無責任かつ犯罪的行動の結果、人間の命が損失を被ったことに遺憾の意を公式に表明した。

一方、二五日日曜日に米国の提訴で国連緊急安全保障理事会が開催され、中央情報局職員ジェームズ・ギャノンがブリーフィングを行った。米国連大使オルブライトは非難声明採択を急いだ。二六日月曜日、米国下院での審議案、「ヘルムズ・バートン法」をクリントン大統領は支持、キューバに対する経済制裁をさらに強化し、チャーター便の運行を禁止した。この法は自由貿易を阻止し、経済活動における世界の商業行為を規制するものがあり、国境を越えて第三国にも課せられる危険な残酷な条項をもっている。これはキューバだけを締め付ける法であるばかりでなく、米国人も含めた世界に対し挑戦を突き付けている。

二月二四日は年中行事のカーニバルの日であった。土曜日の夜までに墜落事件はハバナ市民の知るところとなったが、カーニバルを祝う市民の熱気と人気のサッカーチームの優勝への喜びには全然水を差されることはなかった。

(キューバ外相の第五十回国連総会演説より)

◆ 投稿 ◆

批判の時代から責任の時代へ

(一) 我々はどうするかを考えるために本気で今日の経済、政治の客観的な情勢分析を自らの頭でなさねばならない。その上で党及び労働組合をどう再建するのか、これも自らの頭で考えねばならない。

率直にいつて「大きな変動期」なのだ。したがって、今日・明日の単位でものを考えると、情勢にふりまわされる。先を見通すこと、そのためには現在までの情勢の分析が深くなければならぬ。分析の深さと先のきよりは比例する。戦後五〇年は敵からいえば「戦後政治の総決算」なのである。この意味、この局面をしっかりと把握することなしに、なにをなすべきかは出てこようはずがない。今はいつさいの個人的保身をすてること、この間の歴史的総括をすること、そして運動の局面転換の意味をつかみ、歴史的進歩のために何をなすべきかを先をみて考えること、そして当面の党のことを考えること。これ位の大きな作業をともしなう。いかなる経験主義も通用しない。勉強！勉強！科学的に考えるために(二) 私はそのことを考え、つねにその観点から文書も公表してきた。今日は書く時間がない。要は反動期を迎えようつために、もはや社会党の流れの中でまいぼつできない(情勢から)。したがって総括、分析のうえに党と労働組合の再建(労組は別組織をつくるということではないよ)の方針をたて意志統一すべき。意見を出しあおう。

(三) 党再建を腹にすえ、本格的再建論議をおこす。つけ焼きばの党づくりなどは通用しない時代なのだ。

(四) 三月二四日の県本部大会は絶好の党再建の出発の時とする。全力で！

(えひめ・N)

◇読者からのおたより◇

タダでは起きない 正月明け早々、路上で転倒し、足首の靭帯を痛めリタイヤしたSさんも今は完治し、元気に戦線復帰。「タダでは起きない、なにか拾ったのでは・・・」との、巷の声もあるが、今だその真相は明らかになっていない。「療養中、仲間の思いやりを改めて感じた」と言うSさん。家でテレビを観ていて、ゴマ油健康法を発見！二十年来悩んでいたヒフ病にと早速実行に。「ケガの巧妙」ではないが、こちらも完治し、ゴマ油健康法にすっかりはまっている。ひそかにバイト先で、このゴマ油がブームに！（北海道・N）

編集部より 健康食、自然食ブームとか。「ゴマ油」発見、さすが闘争団

「分・民」から十年 国鉄が「分割・民営化」され十年目を迎えようとしている。そうした中、私たちが指摘してきたように、まさに今、長期債務問題、三島・貨物の経営問題、雇用問題、採用差別事件等「分割・民営化」の矛盾が一举に噴き出し、国民の前に明らかになってきている。「分割・民営化」の見直しはないと言っていた運輸省も「平成九年度問題プロジェクトチーム」を発足させ諸問題の検討を始めている。このように私たちにあって有利な情勢は生まれてきていますが、一方では国鉄闘争の風化も言われています。そういう意味では、この有利な情勢を活かし、一日も早い全面解決を勝ちとるためにも今一度、世論づくりはもちろん、地域共闘の仲間の皆さんに「解雇撤回・一日も早いJR復帰」の闘いを広め、支援・協力を得なければなりません。

（福岡・J）
編集部より JR「分割・民営化」の矛盾は現資本主義体制のもつとも弱い環。勝利のために何が必要なんでも組織拡大。困難さは分かっています。でも頑張りなければ。

「新社会党」結党大会に参加 誌代たいへん遅れて申し訳ありませんでした。三月三日の結党大会に参加しました。感動し、目頭を熱くしました。同時に今後の我々に課せられた歴史的任務に身の引き締まる想いでした。苦難を乗り越えて、展望を切り拓いていきましょう！ニュース送付いただきありがとうございます。（広島・T）

（広島・T）
編集部より 「新社会党」はみんながつくり出した党です。人を当てにせず「自ら育てる」新社会党と共に己も成長する。との気構えが必要。

破防法適用に絶対反対 静岡市内で開かれた「つぶせ！破防法3・8集会」に参加した。公安調査庁が調査・情報収集の対象を労組や自然保護団体・消費者・ボランティア団体などへ拡大し、オウム事件を口実に、団体適用策動の激化を企図している現状を深く認識した。破防法の恐るべき危険な本質に警笛を強く鳴らし続け、平和・民主主義と、思想、信条、言論、集会、結社、表現の自由を断固として守り抜かなければならない。（沼津・T）

（沼津・T）
編集部より 破防法適用問題については、近く専門家の原稿を掲載する予定です。

「新社会党三島支部」結成 三月二十日新社会党三島支部結成。社民党には未来はないぞ。新社会党に結集し、反独占、社会主義でいこうや、社会主義協会本部は三交代労働者から学べ。（三島・A）

（三島・A）
「より確かなもの」へ・・・「平和国家としての日本の前途は、まさに新社会党にかかっている」との大きな期待や、「かすかな政治の曙光に将来の希望を託し、『小さき旗揚げ』に期待します」との各界の方々からの激励も相次ぎました。憲法の理念を実現するために、意欲的に活動する全国政党づくりを兵庫の皆さん方と追求しつづけただけに、熱気あふれた新社会党結党大会の第一歩を「より確かなもの」として育てていきたいと思えます。：

（ひろみ通信抜粋・衆議院議員 岡崎ひろみ）
編集部より 「新社会党結成」おめでとう。念願成就ですね。おっしゃるようにこれから、ともに頑張りましょう。